



# とびっくす No.92

(本誌はホームページでもご覧いただけます。http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/)

## 2019年の海況トピック

本号では2019年を振り返り、海況トピックについて特集します。

### 1. 2019年における島根県の水温経過

島根県浜田市沿岸の定置水温は1～4月にかけて平年より高めで推移しました。1月においては平年より1.6℃も高くなりました(図1)。3月の海洋観測においても水深100mに高水温の海域が多くなっていました(図2)。その要因は対馬暖流の勢力が強かったことが考えられます。対馬暖流の勢力は通常12月をピークに1月から勢力が落ちて、4月頃から再び勢力が強くなりますが、気象庁によると2019年の1月～4月までの対馬暖流の勢力はあまり弱まることなく推移しました。このことが春先の高水温に影響したと考えられます。

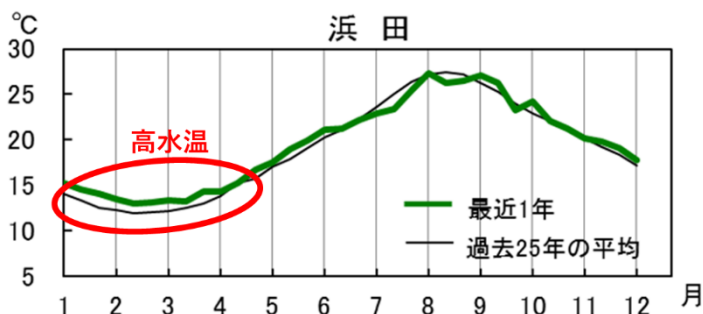


図1. 浜田市沿岸の定置水温  
1月～4月にかけて平年(過去25年の平均)より水温が高い

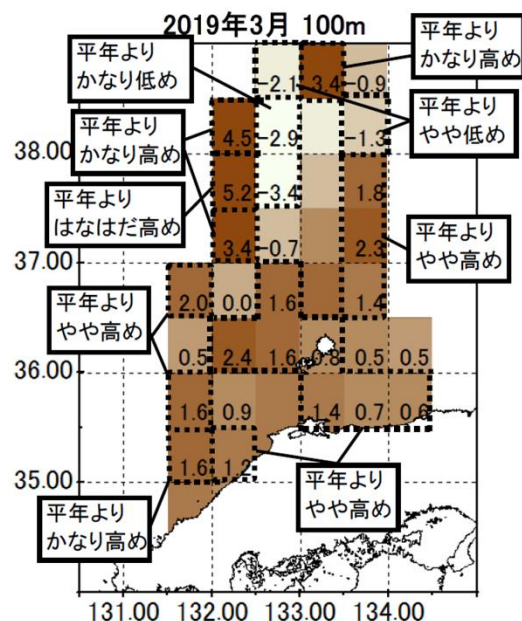


図2. 水深100mの水温(2019年3月)  
平年より高い海域が多い

### 2. 日本海でサルパが大量発生

2019年は春先に東シナ海から日本海全域で大型の動物プランクトンであるサルパが大量発生しました。隠岐では定置網に大量入網し、選別作業に時間がかかるなど操業に支障をきたしました。

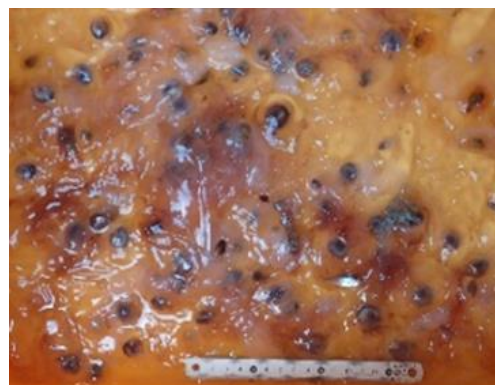


写真1. 試験船島根丸のトロール調査で入網したサルパ  
黒い部分(消化管等)が透明な体に包まれている

### コラム：サルパの基礎知識

- ◎大きさ：全長数ミリ～数センチ
- ◎生態：ホヤの仲間分類されクラゲと同様にゼラチン質の体をもつ動物プランクトンで、主に外洋域に生息しています。サルパは単体で浮遊していることもありますが、群体とってたくさんの個体が集まった集合体を形成していることもあります。
- ◎大量発生：2000年にはサルパが港内を埋め尽くして泡だらけの状態になり、漁船の航行に支障が出ました。2004年にはオオサルパという大型のサルパが日本海で多く発生し、場所によっては底びき網などの漁業に影響を与えました。近年のサルパが増えた原因は海水温の上昇など海況の変化によると言われてはいますが、はっきりとしたことは分かっていません。
- ◎漁業被害：サルパの被害は定置網、底びき網を始め刺網、まき網など広範囲に及んでいます。サルパが網に入ることにより漁具の破損、操業効率の低下、操業海域の縮小、漁獲物の選別時間の増加などの被害が生じます。



写真 2. 群体となったサルパ

### 3. 大型クラゲが 10 年ぶりに大量発生

2019 年は 10 年ぶりに大型クラゲ(主にエチゼンクラゲ)の大量発生が確認されました。まとまった個体数が確認されたのは 6～9 月までで、長崎県から石川県の広範囲で出現しました。島根県では主に 7～8 月に出現しました。

県内の定置網漁業者を対象に行った調査によると大型クラゲの入網状況は 10～100 個/日でした。出雲、江津、益田の一部の定置網では 7 月下旬に 200～2,000 個/日の入網があり操業に支障をきたしました。

### コラム：エチゼンクラゲの基礎知識

- ◎大きさ：大きなものは傘の直径が 1m 以上、重量 200kg 以上になります。
- ◎生態：中国や韓国の沿岸で発生し、成長しながら海流に乗って日本海を北上し、毎年夏～秋に本県沿岸に来遊します。表層から水深百数十mまでを遊泳しており、餌はプランクトンです。寿命は1年で日本海での繁殖は報告されていません。
- ◎大量発生：エチゼンクラゲは時折大量発生して問題となります。これまでの大発生の記録は 2001・2005・2006・2009 年となっています。大発生の原因としては、海水温の上昇、中国沿岸の富栄養化、餌が競合する魚類の減少などが挙げられていますが、まだはっきりとしたことはわかっていません。
- ◎漁業被害：クラゲの被害は定置網、底びき網を始め刺網、まき網など広範囲に及んでいます。サルパと同様に漁具の破損の他、クラゲの触手による魚体の損傷(商品価値の低下)などの被害が生じます。



写真 3. エチゼンクラゲ

#### 4. 浮魚類の不漁について

2019 年は多くの浮魚類が不漁となり、それらを漁獲の主体とするまき網漁業の漁獲量は平年値(過去 5 年)と比べ 4 割近く減少しました。

【マアジ】・・・2019 年のマアジの漁獲量は 1 万 6 千トンで平年の 6 割でした。漁獲の主体は 2 歳魚(2017 年生まれ)で、例年と異なり 0 歳魚(2019 年生まれ)と 1 歳魚(2018 年生まれ)が少ない状況でした。試験船島根丸が実施しているマアジの新規加入量調査からも 0・1 歳魚の資源量は少ないと推定されていました。

【サバ類】・・・2019 年のサバ類の漁獲量は 8 千 9 百トンで平年の 4 割でした。産卵量調査などから漁獲の主体となる 1 歳魚(2018 年生まれ)の資源量は少ないとされています。島根県で漁獲されたサバ類も市場調査による測定の結果から 0 歳魚(2019 年生まれ)と 1 歳魚(2018 年生まれ)が例年より少ない状況でした。

【マイワシ】・・・2019 年のマイワシの漁獲量は 2 千 4 百トンで平年の 1 割でした。2015 年～2018 年は比較的好調となり、2019 年も豊漁を期待されましたが 2014 年以来の不漁となりました。

#### 【不漁要因】

不漁要因は、水温の影響などから餌環境が悪く稚魚の生残率が低下した可能性や、春先に対馬暖流の勢力が強かったことが来遊に影響を及ぼした可能性があると考えられます。今後、海洋環境と合わせて解析していく必要があります。

#### 5. ケンサキイカの不漁について

ケンサキイカは主にいか釣漁業で漁獲されます。2019 年のケンサキイカの漁獲量は 560 トンで平年の 5 割でした。2019 年は春から夏のケンサキイカ(写真 6. 上)の漁獲量は平年をやや下回る程度でしたが、秋のケンサキイカ(写真 6. 下)の漁獲量は九州地方から日本海の広範囲で記録的な不漁となりました。その要因は対馬暖流の勢力が強かったことなどが影響した可能性があります。明確な要因は分かっていません。



写真 4. 新規加入量調査で採集されたマアジの稚魚



写真 5. 浮魚類の魚体測定の様子



写真 6. ケンサキイカ  
上はケンサキタイプ(春から夏にかけて漁獲されスマートな体型)  
下はブドウタイプ(秋以降に漁獲されずんぐりした体型)



## 6. 2019年に獲れた珍しい生物

2019年（一部2020年）県内で獲れた珍しい生物を紹介します。



リュウグウノツカイ（隠岐郡隠岐の島町  
2020年1月 漁港にて採捕）  
特徴的なフォルムの深海魚で、海岸に打ち上げられると話題になることが多いです。



ノコギリガザミ類（出雲市大社町 2020年  
2月 定置網にて漁獲）  
房総半島以南の太平洋側に分布しており山陰での漁獲は珍しいです。  
（JFしまね大社支所提供）



ヤナギノマイ（隠岐郡隠岐の島町  
2019年8月 釣りにて漁獲）  
新潟から北海道の日本北部に分布しており、島根県での漁獲は珍しいです。



カギイカ（浜田市瀬戸ヶ島町 2020年1月  
岸壁からバケツにて採捕）  
相模湾以南に分布し、本種の稚イカが山陰沖で採捕されることは珍しいため、博物館にて保存される予定です。

島根県水産技術センター 島根県浜田市瀬戸ヶ島町 25-1  
担当者: 海洋資源科 安原豪  
TEL: (0855)22-1720 FAX: (0855)23-2079  
ホームページ: <http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/>  
E-mail: [suigi@pref.shimane.lg.jp](mailto:suigi@pref.shimane.lg.jp)